［報告要旨］ 植民地期インドにおける農民運動の再検討―社会運動論の視点から

小嶋常喜

1．はじめに
2．農民運動研究の視角
3．インド近代史における農民運動
4．社会運動論の視点から
5．おわりに

1．はじめに

歴史研究においてマルクス主義やそれを基礎とする諸理論や概念が相対化され、社会史などの新しい視角やポストモダニズムなどの新しい理論が登場し、そして社会人類学などの隣接学問との連携の中でより分化・専門化した精緻な分析がおこなわれるようになって久しい。インド近現代史研究においても、サバルタン・スタディーズが民族主義史観や「正統な」マルクス主義的分析視角を相対化して以来、歴史叙述に大きな変化が生まれている。筆者も、これらの新しい視角をもった諸研究に大きな影響を受け、またそれらの成果を大いに利用しながら研究を進めてきた。

しかしながら、近年の叙述の変化はインド近現代史の多様な諸側面を明らかにする一方で、いくつかの問題点を抱えていると筆者は考える。第一に、近年の近現代史研究は全体としてわかりづらい、極めて分節化された歴史像しか提示できなくなってしまったということ。第二に、インドでもっとも重要な産業の一つである農業生産に従事する人々の姿があまり反映されていない。つまり農民運動に関する記述や研究が減退したことである。植民地期から 1950 年代まで亜大陸の各地で広範かつ大規模に展開された農民運動がそれ自体叙述の対象とされなくなったのは極めて不自然かつ残念なことである。歴史研究の分析視角としてマルクス主義理論に限界があることは否定しない。しかし農民運動が単なるマルクス主義理論に基づく社会運動の分析視角とみなされ、マルクス主義の後退とともに叙述から消え、異なる分析視角を持つ研究者によって衣替えをした形で再登場することに筆者は違和感を覚える。本報告で強調したい点は、農民運動は単なる分析視角ではなく、インド近代史の中でそのように展開されたということだ。

それではどのような農民運動の捉え方が可能なのだろうか。そしてそれはインド近現代史の歴史像にどのように貢献できるのだろうか。そのような問いに答えるため、本報告ではまず、農民運動がこれまでインドの内外どのように研究・叙述され、どのような問題点があったのかを検討する。次に社会運動研究において蓄積された諸理論・概念を手掛かりに、植民地期における新しい農民運動の捉え方、植民地期全体の中でのその位置づけについて提案してみたい。

2．農民運動研究の視角

いうまでもなく、農業生産は有史以来人類にとってもっとも重要な活動であり、人類が絶滅しない限りそれは何らかの形で続けられるだろう。この農業生産に従事する「農民」についてまず分析を試みたのはマルクス主義理論であるが、マルクス自身は農民の歴史的役割について否定的である。フランス二月革命からルイ＝ナポレオンのクーデタの期間の農民について分析した彼は、「農地の細分化や負債の増大にも関わらず革命的なイニシアティヴを全くとることができない」として、農民を「ずたぶくろの中のじゃがいもたち」と呼んだ[1]。

[1] K. Marx, *The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte*, Moscow, [1852] 1977, p. 106

マルクスによって希望的に示されたプロレタリアートの「自然の同盟者」としての役割は、後代にレーニンが「労農同盟論」として理論化している[2]。このレーニンのように、多くのマルクス主義理論家たちは農民を、資本主義の不均等な発展の中にみられる前近代の遺物であり、やがて農民層分解によって諸階層に解体していくものとして理解している。「西欧マルクス主義」もまた革命的主体としての農民の役割を工場労働者と比して低く見積もった[3]。しかし国際共産主義運動の拡大とマルクス主義の世界への浸透は、こうした古典的マルクス主義の限界を明瞭にした。なぜなら工業化が急速に進展するなかで封建社会から資本主義社会への過渡期にあった西ヨーロッパ諸国を対象として発展したマルクス主義の古典的諸理論は、圧倒的な農業社会である植民地や反植民地状況にあった諸地域や脱植民地化後も国際分業体制の中で低開発社会となった諸地域にそのまま適用することはできなかったからだ。

その意味で毛沢東は農業社会における農民の歴史的役割について考える新たな地平と理論を提供することになった。マルクスが農民のなかに「革命的農民」と「保守的農民」の二階層しか見出さなかったのに対し、毛は農民に階級分析を用いることによって各農民層の革命に対する潜在的貢献度をはかった。その結果彼は、当時の中国の農村人口の 7 割を占めた貧農を、封建的諸勢力を打倒して革命を実現する「前衛」として位置づけることになった[4]。1960 年代になるとこの毛の議論は、当時民族解放運動を展開していたアジア・アフリカ諸国や、散発的ではあるが急進的なゲリラ活動が激化していた南アジアやラテンアメリカの一部の地域などにおいて注目を集めるようになった。そしてベトナム戦争や文化大革命といった経験的事例は、古典的マルクス主義理論における農民の地位を変更させ、「革命勢力」として位置づけさせることになった。

ただし毛沢東理論がそのまま「第三世界」の農民運動や革命運動に適用されたわけではない。たとえばハムザ・アラーヴィーはロシアと中国の革命における農民諸階層の動きを再検討して毛の理論と実践には溝があることを明らかにした。そのうえで雇用労働を使用して資本主義的農業を行う富農に従属せずかつ農業労働者を搾取しない、経済的関係において孤立した(independent)「中農」の参加が革命の初期において極めて重要であったことを指摘した[5]。彼の議論はラテンアメリカの事例から同様の結論を導きだしたエリック・ウルフの議論[6]とともに「中農論」と呼ばれ、1960 年代後半から 70 年代にかけて力をもった。

農民と政治との関わりに注目して議論を進めたのが「中農論」だとすれば、同時代に農民の独特の経済生活に注目して力を持ったのがチャヤーノフによる「農民経済論」であった[7]。「農民」は資本主義的な利益追求の原則ではなく自家消費と苦痛である労働との間の独特のバランスから農業経営を成り立たせているという彼のモデルをめぐっては、当時黎明期の *Journal of Peasant Studies* において多くの議論が交わされ、またそのモデルをつかった事例研究も多く紹介された[8]。同誌における当時のトレンドは方法論的な本質論であったという。つまり、経済的・政治的・社会的に農民を他の人間集団とは区別しかつ特別な存在とせしめているものを概念化し、それによ

[2] V. I. Lenin, *The development of capitalism in Russia: the process of the formation of a home market for large-scale industry*, Moscow, [1899] 1964.
[3] 「西欧マルクス主義」とその傾向については、ピエール・ファーヴル、モニク・ファーヴル(竹内良知)『マルクス以後のマルクス主義』(文庫クセジュ)、白水社、1971 年。
[4] Mao Zedong, 'Report on an Investigation of the Peasant Movement in Hunan', in *Selected Works of Mao Tse-tung*, Vol. I, Beijing, 1967.
[5] Hamza Alavi, 'Peasant and Revolution', *Socialist Register*, 2 (1965).
[6] Wolf, Eric, *Peasant Wars of the Twentieth Century*, London, 1971.
[7] Chayanov, A. V., 1966, *The Theory of Peasant Economy*, D. Thorner, B. Kerblay and R. E. F. Smith (eds.), Homewood: American Economic Association.
[8] 特に創刊年(1973-4)の各号(Vol. 1-4)はその傾向が非常に強い。

って「農民的なるもの(pleasantness)」を構築することが研究者によって追求されていた[9]。

こうした研究者のなかでマルクス主義史家の立場から農民の理論化・概念化をめぐる諸問題に向き合ったのがエリック・ホブズボームであった。彼の初期の関心は近代移行期における「普通」のもしくは底辺に追いやられた人々について向けられ、義賊、千年王国運動、マフィア、そして労働セクトなどの民衆的もしくは「素朴な」形態の集合行為を分析した[10]。そのうえで彼は、これらの集合行為を近代社会におけるより組織化された運動に至る発展プロセスの前段階に位置づけた。また当時の学問潮流に合わせ、農民に関する本質主義的な概念化も彼は試みている。彼によれば、生産手段と政治がほとんど関わりがないという意味で農民は「階級性の低い階級」[11]だという。彼にとって農民としてもっとも不可欠の要素は、経済的差異ではなく社会的差異を受け継ぎ、集団的行動を促す公式ないし非公式な集団性の存在である。農民のあいだの経済的差異がそれほど大きくない場合、「完全なる農民の階級意識」がつくられ、「部外者」に対して対抗することができる。この集団性は都市の人間から分かつその「あいまいな農民意識」のためにときに文化的・地域的境界を越えることができるという。しかしまた一方で、農民運動のひろがりは一般的は限界があり、それは国民の境界にはほど遠い。それゆえある地域の農民運動が他の地域の運動と関係を持ち、全国的なものに成長するためには外部からの指導が必要であり、一般的に農民はそれを待つことができない。ホブズボームにとってこのような農民は、ブルジョワ社会と産業資本主義の勝利によってもたらされる「大転換」とともに階級であることを止めるとされた[12]。

ホブズボームにもみられるように、初期の JPS にあらわれる議論の共通点は、より広い視野をもっていることである。それらは一様に農民をある全体的な構造や発展段階の中に位置づけ、革命や歴史の「発展」において農民が果たす役割を分析している。しかしながら、これらの議論は農民を客観的もしくは外部から概念化・定義付けをする一方で、農民による集団的行為や運動が起こるうえでの内的諸要因についてほとんど関心がなかった。

マルクス主義史家の中のニューレフト運動[13]は農民研究に大きな衝撃をもたらすことになった。E・P・トムスンの研究によって強調された労働者の階級形成における経験と相対的剥奪の感覚、つまり「モラル・エコノミー」は、西欧マルクス主義の「階級」や「階級意識」概念に重大な修正をせまった[14]。彼の研究はさらに農民研究にも影響を及ぼし、内在的論理から農民の性格を再検討する機会を与えた。ジェームズ・スコットの初期の研究は、農民が持つ「搾取されている」という感覚を重視し、どのような状況で「搾取」と認識して「不正」とみなし、そして最終的に反乱という行動を起こすのかという農民の「主観的」意識と集合行為の関係についてだった[15]。その後彼の議論は古典的マルクス主義の概念の「虚偽意識」や「神秘化」に対する批判となり、彼らの言う経済的正義と彼らの間で普及している「搾取」という感覚を理解するには、「深層心理の倫理観」を知る必要がると主張した。そのためにも農民の神話、冗談、詩、言語使用、そして

[9] Journal of Peasant Studies の網羅的レヴューについては、H. Bernstein and T. J. Byres, 'From Peasant Studies to Agrarian Change', *Journal of Agrarian Change*, 1-1 (2001); Tom Brass, 'The Journal of Peasant Studies: The Third Decade, *The Journal of Peasant Studies* (hereafter *JPS*), 32-1 (2005)などが詳しい。
[10] E・J・ホブズボーム（水田洋・安川悦子・堀田誠三訳）『素朴な反逆者たち』社会思想社、1989 年。
[11] この言葉自体は、Teodor Shanin, 'Peasantry in Political Action', in Shanin (ed.), *Peasant and Peasant Societies*, Second Edition, London: Blackwell, [1971] 1987, p. 359 からのもの。
[12] E. J. Hobsbawm, 'Peasants and Politics', *JPS*, 1-1(1973).
[13] ニューレフト運動については、リン・チュン(渡辺雅男訳)『イギリスのニューレフト―カルチュラル・スタディーズの源流』、彩流社、1999 年が詳しい
[14] E. P. Thompson, 'The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century', *Past and Present*, 50 (1971); *The Making of the English Working Class*, London, 1963.
[15] James C. Scott, *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*, New Haven, 1976.

宗教といった農民の民衆文化というものが重視されたのである。

しかし、スコット自身が述べているように、「反乱のない搾取は革命戦争よりもはるかに一般的な状況である」[16]。したがってその後のスコットの研究は非日常的な農民反乱から、「反乱という選択肢が欠如した中で搾取される農民はどのような悲劇的選択肢があるか」という問題に向けられるようになった。彼は文化人類学的な手法を用いてマレーシアのある農村で調査を行い、村落内で政治的・経済的に恵まれていない農民たちの言動を緻密に分析した。スコットは彼らのなまけて仕事を遅らすこと、しらばっくれ、バックれ、従うふり、ちょろまかし、知らんふり、陰口、放火、さぼりという行動に注目し、農民たちがみずからの政治・経済的状況を的確に理解しており、マルクス主義者によって主張された克服されるべき「虚偽意識」や「ヘゲモニー」というものはそもそも権力関係のなかで引き出されたうわべの言説に過ぎないという。むしろこうした「日常的な抵抗」に見られる「隠れた言説(hidden transcript)」こそが、農民が本当に考えていることや支配への抵抗を表現していると彼は主張した。スコットのこうした議論は明らかにトムスンやホブズボームの理論的影響を受けているものの、彼は農民たちの組織化されない日常的抵抗がより組織的な運動に発展していくという単線的な発展モデルを拒否している[17]。

スコットがグラムシのヘゲモニー論を完全に否定し、また国家権力に対して強力な農民の主体を想定していることに対して批判がある。また「日常的抵抗」がなんの公然たる反乱なしに社会構造に変化を起こしうるというスコットの主張は歴史において全く例証がないとして、とくにラテンアメリカ研究者からさらに激しい批判を浴びた。これらの批判に対への回答として、スコットは、自分の調査地であるセダカ村における階級間の緊張関係がなぜ階級戦争に発展しなかったのかについて 3 つの理由を挙げている。第一に二期作の導入によって約半数の村人が豊かになり、導入しなかった人でさえ自らの生存や生活を脅かすような危機にはめったに陥らない状況にあること。第二に節約や移住といった貧困に直面したときに選択肢はたしかに痛みを伴うものであるが、インドネシアやインドの貧困層が直面しているような厳しい選択ではない。そして第三に社会構造自体が「一枚岩的な少数の地主」と「その他大多数の農民層分解していない貧困層」といったわかりやすい対照的様相を示していなかったと、自らの理論の普遍性について留保する返答をしている[18]。

3．インド近代史における農民運動

インドの歴史研究全般においてそうであったように、インドの農民運動史研究における議論も、長い間民族主義とマルクス主義の二つを軸に展開してきた。農民運動に関する記述ははやくも 1940 年代末から登場し、それらは実際に農民運動に関わったマルクス主義者の手によるものが多い[19]。彼らの記述は一様に、植民地期における農民運動が 19 世紀の散発的かつ「自然発生的」なものから、20 世紀には明確な階級意識を持ちかつ政治的な指導をうけた「組織的」な運動へと変化したという、単線的発展モデルを想定している。また彼らにとって、マルクス主義と民族主義

[16] *Ibid.*, p. 4.
[17] James C. Scott, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven, 1985.
[18] この論争については Blanca Muratorio, 'Review: *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, *American Ethnologist*, 14-3 (1987); Matthew C. Gutmann, 'Rituals of Resistance: A Critique of the Theory of Everyday Forms of Resistance', 'Rejoinder', and Scott, 'Reply', all in *Latin American Perspective*, 20-2 (1993)および Scott, *Weapons of the Weak*, pp. 147-8 などを参照されたい。
[19] たとえば E. M. S. Namboodripad, *A Short History of the Peasant Movement in Kerala*, Bombay, 1943; N. G. Ranga, *Revolutionary Peasants*, Delhi, 1949; L. Natarajan, *Peasant Uprisings in India (1850-1900)*, Bombay, 1953; H. D. Malaviya, *Land Reforms in India*, Delhi, 1954; P. Sundarayya, *Telangana People's Struggle and its Lessons*, Calcutta, Delhi, [1972] 2006 などがある。

は対立・矛盾するものではなかった。そのため彼らは、1920 年代以降の農民運動はインド国民会議派、会議派社会党、インド共産党などの強力な指導下に、「反帝・反封建闘争」としての民族解放闘争の一翼を担った成熟した農民運動であると評価してきた。1917 年のチャンパーラン闘争においてガンディーと在地の農民層がどのようにして関係を切り結んだかといった「古典的」分析視角は、まさに「マルクス主義的民族主義」を地で行くようなものだった。

1960 年代に入ると、「農民運動」を独立した研究テーマして扱う研究者による、第一世代の農民運動史研究が登場する。これらの研究においても民族主義運動は農民運動を活性化させる重要な要素のひとつとして捉えられている。たとえばインドの農民運動史研究のパイオニアといわれるウォルター・ハウザーのビハール州キサーン・サバーの研究は、農民運動の組織自体に焦点を当てつつも、キサーン・サバー(農民組合)と国民会議派の政治家との関係についても詳しく論じている[20]。1920 年前後に活発化した連合州東部のキサーン・サバー運動を分析した M・シッディーキーの研究も、非協力運動や国民会議派との連携があったからこそ農民運動の組織と活動を拡大できたと主張している[21]。その意味では、この世代の農民運動史研究も「マルクス主義的民族主義」の枠内にあったといえる。

その後、先述の毛沢東に始まる農民の階級分析やウルフの中農論、そしてバリントン・ムーアがインドの農民運動をカーストや言語の壁によって分断された変革志向の弱いものだと指摘した[22]ことは、農民運動史研究に新しい傾向を生みだした。すなわち 1970 年代からの第二世代の農民運動史研究はより厳格な階級論に立脚し、どの階級が農民運動において主要な役割を果たしたかという分析を中心に据えた。インドの農民運動史研究においては中農論を支持した研究者は少なく[23]、それを批判する形で議論が展開した。たとえば M・シッディーキーと同じキサーン・サバー運動を研究したカピール・クマールは運動で主要な枠割を果たしたのは貧農であったと主張し[24]、1920 年から 1950 年までのインド各地の農民運動を分析したダナーガレーも、中農論を批判する立場から必ずしも中農が主要な役割を果たしているわけではないと主張した[25]。また厳格な階級論から農民運動を分析した彼らの傾向として、民族主義運動が農民運動に対して抑制的な性格を持つことを強調している。この傾向は 1980 年代から登場する初期のサバルタン研究がより明確に示している。

初期のサバルタン研究に現れる農民運動論は、民族主義に対する否定的な評価については第二世代と共有している。そのいっぽうで、「生産関係」や「階級意識」といったマルクス主義の諸概念を厳格に使って分析することが次第にみられなくなり、運動や集合行為を説明するうえでトムスンやスコットのような集団の内的論理が重視されるようになった。結果としてコミュナルな意

[20] W. Hauser, 'The Bihar Provincial Kisan Sabha, 1929-1942. A study of an Indian Peasant Movement', University of Chicago Ph.D. thesis, 1961.
[21] Majid Hayat Siddiqi, *Agrarian Unrest in North India*, Delhi, 1978.
[22] バリントン・ムーア(宮崎隆次・森山茂徳・高橋直樹訳)『独裁と民主政治の社会的起源』(I)・(II)(岩波現代選書 121)、岩波書店、1987 年。
[23] 中農論を採用した研究としては、David Hardiman, 'Politicization and agitation among dominant peasants in early twentieth century India', *Economic and Political Weekly*, 11-9(1976). pp. 365-369; David Hardiman, Hardiman, David (1977) 'The crisis of the lesser Patidars: peasant agitation in Kheda District, Gujarat', in *Congress and the Raj: facets of the Indian struggle, 1917-47*. Heinemann Educational, London, 1977, pp. 47-75; Harcourt, Max, 'Kisan Populism and Revolution in Rural India', in D.A. Low (ed.), *Congress and the Raj*, London: Heinemann, 1977; Brian Stoddart, The structure of Congress politics in coastal Andhra, 1925-37, in D.A. Low (ed.), *Congress and the Raj*, London: Heinemann, 1977 などがあるが、ハーディマンはその後中農論から撤退した。
[24] Kapil Kumar, *Peasant in Revolt: Tenants, Landlord, Congress and the Raj in Oudh, 1886-1922*, Delhi, 1984.
[25] D. N. Dhanagare, *Peasant Movement in India 1920-1950*, Delhi, 1983.

識、カースト意識、ローカルな権力関係などが複雑に絡み合った運動は、「階級」に基盤を置いた「農民運動」とは表現されなくなった。また

4. 社会運動論の視点から

これまでの先行研究の分析から言えるのは、個別の事例研究や類似の事例の比較研究を超え、長期的かつ網羅的に農民運動の展開見ることがほとんど行われてこなかったことだ。植民地期を通観する視角が完全になかったわけではない。たとえばキャスリーン・ガフは、植民地期以降の 200 年間に起きた 77 の農民蜂起を復古的運動、宗教的運動、義賊的運動、大衆反乱、そして近代的運動に分類した。そのうえで彼女は、農民蜂起の一般的な傾向として、植民地権力に対抗する「革命的」なものから次第に特定の要求を掲げる改良的なものへ変化した主張する[26]。またビパン・チャンドラ、ハーディマン、スミット・サルカールなどは、インド大反乱を境に農民蜂起の形態が、在地有力者を筆頭に村や地域全体が蜂起するものから、地域的かつ特定の不満に特化したものへと変化したと述べている[27]。ただこれらの研究は分析者自身が「農民運動」というカテゴリーを設定してそれにあてはまる運動を分析対象として選択し、それらの農民運動が時期によってどのような特徴を持ち、またそれらがどのように変化したかを見るものだった。研究者があらかじめ諸々の社会運動を分類したうえで、カテゴリー別に分析・レヴューを行うスタイルは、インドの社会運動研究で良く見られる[28]。しかしこれでは研究者によって分類がまちまちになるし、異なるカテゴリーに分類された運動間の関係が見過ごされてしまう。

ここではそのような問題を避けるため、欧米の社会運動論で多用されてきた「サイクル」と「フレーム」の概念を使い、植民地期の農民運動を長期的に分析してみたい。ここでいうサイクルとは、1980 年代以降よく議論されるようになった社会運動の発展・衰退モデルである。このサイクルについては、細かい点で違いはあるものの、大筋では運動の発生・組織の台頭・運動のピーク・制度化と急進化・衰退といった諸局面があることが一般的となっている。そしてむしろ社会学者の間で議論の対象となってきたのは、こうしたサイクルがどのような要因によって次の局面へと展開していくかということである。シドニー・タローやルード・クープマンズは、レパートリー（争議手段）の革新、政治的機会、政府による抑圧や妥協などが重要だとしており、ここでもそれらによって形成される運動の興隆と衰退の軌跡をサイクルとして定義する[29]。ただ、ここでいうサイクルは単一の運動ではなく争点を共有する複数の運動にまたがる大きなサイクルとしたい。またフレームについてはデーヴィッド・スノーらが「個人の現在、あるいは過去の環境における対象、状況、事件、経験、または連続的な行為を、選択的に強調・記号化することによって今生きている世界を単純化し、要約する、説明的な図式」だと定義している[30]。社会運動にもっと即

[26] Kathleen Gough, 'Peasant Uprisings in India', *EPW*, Special number, Aug. 1974.
[27] Bipan Chandra, *India's Struggle for Independence*, Delhi: Penguin, 1988; David Hardiman, *Peasant Resistance in India, 1858-1914*, Delhi: OUP, 1994; Sumit Sarkar, *'Popular Movements' and 'Middle Class' Leadership in Late Colonial India: Perspectives and Problems of a 'History from Below'* (Sakharam Ganesh Deuskar lectures on Indian history), Calcutta: CSSS, 1983.
[28] M. S. A. Rao(ed.), *Social Movements in India: Studies in Peasant, Backward Classes, Sectarian, Tribal and Women's Movement*, New edition, Delhi: Manohar, 1984; Ghanshyam Shah, *Social Movements in India: A Review of Literature*, Second Edition, Dehi: Sage, 2004; T. K. Oommen (ed.), *Social Movement I: Issues of Identity, II: Concerns of Equity and Security*, Delhi: OUP, 2010.
[29] Sidney Tarrow, "Cycles of Collective Action: Between Moments of Madness and the Repertoire of Contention", *Social Science History*, 17(2), 1993; *Power in Movement: Social Movements, Collective Action and Politics* (2nd ed.), New York: Cambridge University Press, 1998. R. Koopmans, *Democracy from Below: New Social Movement and the Political System in West Germany*, Boulder: Westview Press, 1995.
[30] D. A. Snow and R. D. Benford, 'Master Frames and Cycles of protest' in A. Morris and M. Carol (eds.),

して言えば、より広範な支持や運動参加者を獲得するために、自らの訴えている問題点などを意図的に強調したり、また運動の要求・対象を単純化して多くのひとに理解しやすいものにしたりするための枠組のこととしておく。

これらの分析概念をつかうと、「農民運動」は植民地期の最後の 30 年間に登場し、当時の主要な社会運動のフレームとして機能したと把握することが可能ではなかろうか。表 1 はインド各地の農民運動の展開を比較したものである。これをみると、「農民運動」というフレームを持った全インド的な社会運動のサイクルが、およそ 30 年間展開したといえるのではないだろうか。まず 1910 年代後半から 1920 年代にかけては、ビハール州西部や連合州東部でみられたようなローカルな農民組織が設立され、民族運動が農民との関係構築を模索した時期といえよう。ただしこの時期には「コミュナル」な要素も垣間見える。その後政治的機会を得た運動は、州レベルの組織を立ち上げるまでに成長する。1930 年代半ばには、ナショナル・センターとしての全インド農民組合が築かれ、その下では農民諸階層をゆるやかに包摂する「農民(キサーン)」という新しいアイデンティティを創りだすことにも成功した。1930 年代後半のインド人による州政権下の小作立法や独立前後の第一次土地改革によって、この「農民運動」はその要求が実現していく「制度化」段階に入る。しかし同時に要求を実現することができなかった一部の「農民」は、活動を急進化させて「制度化」を進める勢力とたもとを分かつ。下級小作や農業労働者のための別個の組織の設立や、独立前後に起きたベンガルのテーバガ運動やテランガーナー農民闘争などの暴力を伴う激しい運動は、この「急進化」の一端を示すものとして理解できよう。そしてこの「農民運動」のフレームを持った運動は、急進化に伴う「農民」の分解や政府の弾圧によって 1950 年代には解体・終焉を迎える。

5. おわりに

本報告では、まずマルクス以来の農民運動研究とそれを受けたインドの農民運動史研究を振り返り、その問題点を明らかにした。そして新たな農民運動史研究の試みとして、社会運動論の諸概念を使って植民地期インドの農民運動を再検討した。およそ 150 年間のイギリスによる植民地支配の間に、「農民運動」というフレームをもった社会運動の大きなサイクルが展開したのは 30 年ほどしかない。それ以前の「農民運動」については、その他の諸運動とともに別の社会運動のサイクルの中に位置づけられるべきと考えるが、それがどのように展開したサイクルで、またどのようなフレームを持っていたのかといった問題は今後の課題としたい。またそうした課題は、植民地期の最終盤に現れた「農民運動」というフレームをもつサイクルがなぜ生みだされたのかという、フレームの連関を考えるうえでも重要だと思われる。

表1「農民運動」のサイクル(1910年代後半から1950年代前半)

	インド全般のできごと	連合州	ビハール	ベンガル	グジャラート	アーンドラ (テランガーナー含む)	マラバール地方	運動のサイクル
1915～	第一次非暴力的抵抗運動 (1919-1922)	連合州農民組合発足(1918) 牝牛保護運動激化(1917)	チャンパーラン闘争(1917-8) 牝牛保護運動激化(1917)		ケーダーの農民闘争(1918-9)			運動の発生～ ローカルなレベルでの農民の組織化
1920～		アワドのキサーン・サバー運動(～1921) アワド地代(改正)法(1921) アワド北部でエーカー運動(1922) カーンプル暴動(1924) アーグラー小作(改正)法(1926)	スワーミー・ヴィディヤーナンドのキサーン・サバー運動(1920) [1920年代前半]反地主運動の要素を持つゴアーラー運動が激化	[1920年代]]ジョトダールや下級ライオットの組織化 (Ryot Krishak Sabha)		[1920年代前半]ゲントゥール県や西ゴダヴァリ県などでローカルな組織化の試み(ryot sangham)	マーピラによるローカルな組織化(kudiyan sangham)(1920) マーピラ(大部分はヴェルムパッタム小作)の蜂起(1921) マラバール小作組合(kudiyan sangaham)結成(1922)	民族運動が農民との関係を模索 コミュナルな要素が散見
1925～	インド共産党創立(1925)		西パトナー農民組合発足(1927) ビハール州キサーン・サバー発足(1929)	[1920年代]宗派対立の要素を持つバルガーダールとジョトダール・金貸しの暴動(パブナ・マイメンシン)	バールドーリー・サティヤーグラハ(1928)	アーンドラ州ライオット協会(1928) アーンドラ州ザミーン・ライオット協会(1929)		組織の台頭～ 運動が政治的機会を獲得して州レベルの組織化・組織の拡大がはかられる
1930～	第二次非暴力的抵抗運動(1930-34) 会議派社会党創立(1934)	連合州の地代不払い運動始(1931)	シャハーバード県でトリヴェニ・サング発足(1934)			ゲントゥール県農業労働者協会(1933)	マラバール小作法成立(1930) ケーララ会議派社会党組織(1934)	
1935～	コミンテルン第7回大会(1935)が統一戦線戦術を提起 全インド農民組合成立(1936) ファイズプル農業綱領採択(1937) 各州でインド人内閣発足(1937)	連合州小作法(1939)	ビハール借地(改正)法(1937・1938) ビハール・バカーシュト地回復・滞納地代減額法(1938) ビハール州のバカーシュト闘争激化(1938-40)	ベンガル州キサーン・サバー発足(1936)、ブルドワン用水税運動開始 ベンガル負債取り消し法(1937) ベンガル借地(改正)法(1938) 北ベンガルジョトダールとバルガーダール(アディアール)の衝突多発(1939-1940)	インドゥラル・ヤーグニクらがグジャラート農民協会設立(1939)	南インド農民・農業労働者連合、マドラス管区ライオット協会(1935) マドラス地所法(1936) アーンドラ州農業労働者組合(1937) マドラス管区農業者協会(地主の組織)(1937)	カルシャク・サンガム(農民組合)発足、以後ヴェルムパッタム小作中心の運動へ(1935) 全マラバール・カルシャク・サンガム発足(1937) マラバール小作法改正を要求する運動激化(1938)	運動のピーク～ ナショナル・センターの発足・「農民」アイデンティティ 運動の「制度化」と「急進化」～ 州政権による小作立法、土地改革の成立・検討
1940～	クウィット・インディア運動(1942) 中間政府発足(1946)		BPKSが分裂(1944)	ベンガル地租委員会報告(1940) ベンガル飢饉(1943)		ランガーがアーンドラ州キサーン会議設立(共産党指導部と決別)(1942)		組織の分裂 戦闘的運動の登場
1945～	インド・パキスタン分離独立(1947) 会議派農業改革委員会報告(1949)	地主の土地取り上げ頻発(1946-) トリヴェニ・サングの活動 ショシット・サングの活動	バカーシュト闘争激化(1946-9) ビハール・バカーシュト地紛争解決法(1947)	テバガ運動(1946) 西ベンガルバルガーダール令(1949) 西ベンガルバルガーダール法(1952)	ボンベイ州議会で諸々の土地改革法が成立(1949-1951)	テランガーナー運動(1946-1951) マドラス地所(廃止およびライヤットワーリー変換)法(1948)	戦闘的な武装闘争、稲の「公正価格」での強制買い取り	
1950～		ウッタルプラデーシュ州ザミーンダーリー制廃止土地改革法(1951)	ビハール土地改革法(1952)	ベンガル土地改革法(1955)		アーンドラプラデーシュ・イナーム地(廃止およびライヤットワーリー変換)法(1956)	マラバール小作(改正)法(1954)	運動の衰退～

[参考文献]Gupta, Rakesh, *Bihar Peasantry and the Kisan Sabha (1936-1947)* , Delhi: People' s Publishing House, 1982.; Das, Arvind, *Agrarian Unrest and Socio-economic Change, 1900-1980* , Delhi, 1983; Dhanagare, D. N., *Peasant Movements in India, 1920-1950* , New Delhi: OUP, 1983.; D. Hardiman, *Peasant Nationalists of Gujarat: Kheda District 1917-1934* , OUP, 1981; Kumar, Kapil, *Peasant in Revolt: Tenants, Landlord, Congress and the Raj in Oudh, 1886-1922* , Delhi: Manohar, 1984; Asok Majumdar, *Peasant Protest in Indian Politics* , Delhi: NIB, 1993; Malaviya, H. D., *Land Reforms in India* , Delhi: Indian National Congress, 1954; G. Parthasarathy, *Agrarian Structure, Movements and Peasant Organizations in India, Andhra Pradesh Vol. I*, Delhi: Manak, 2004; P. Radhakrishnan, *Peasant Struggles, Land Reforms and Social Change: Malabar 1836-1982* , Sage,1989; Siddiqi, Majid H., *Agrarian Unrest in North India* , Delhi: Vikas, 1978; 佐藤宏「テバガ運動とその背景—ディナジプル県を中心に」『アジア経済』11-10(1970年10月)、アジア経済研究所.